

「支援」の終わり 「協働」の始まり

復興へ向かう陸前高田市のいま (第十一報、最終回)



日本赤十字秋田看護大学
佐々木亮平

(ささき・りょうへい) 看護学部 助教

連絡先

〒010-1493
秋田県秋田市
上北手猿田字苗代沢 17-3
018-829-4125
ryohei-s@rcakita.ac.jp

I はじめに

東日本大震災発災(3・11)から一年です。被災地の方々、被災地へ支援に入った方々、被災者を受け入れた方々、直接的にはかかわれなかった方々など、それぞれの立場で迎えるこの一年という節目をどのように受け止められていますでしょうか。自然な反応として「アニバーサリーリアクション(記念日反応)」が私自身も含め、多くの方にあるのではないのでしょうか……。壊滅的な被害を受けた陸前高田市(以下、市内または現地)や大槌町、南三陸町に限らず、その地域の被害の程度に合わせた「復旧」そして「復興」へ、とにかく走り続けた一年だったと思います。と同時に被災者、被災地は永遠に被災した事実と向き合わなければならぬことを今更ながら突き付けられています。

私も大学本務と並行しながら、10カ月間はほぼ毎週、延べ40週100日間以上、現地に通い続けました。この異常とも言うべき一年間の疲労が私に限らず、関係する多くの方々に色濃く出ているような気がします。

では、この一年でできたことと、できなかったことは何だったのか。私の中にもいまだに答えはありません。その被災地なりの課題に合わせた対策が行われ、今また新しい春を迎えようとしています。昨年5月に始まった本誌での連載も、毎月その都度その都度、現地の状況を一地域限定ではありませんが全国のみなさまにご報告し、課題共有させていただきました。震災から一年という節目を機に今月号で一度、連載は終了させていただきます。

今回は震災から一年の経過とともに平成24年1月20日以降、現在(平成24年2月18日)までの1カ月間の状況をご報告いたします。

II 全力で真剣に向き合う姿勢

1月に市内の2つの地区の仮設住宅で健康教育を行わせていただきました。ここで印象に残ったのが、同じ仮設住宅であっても地区や形態によっても、仮設住宅の規模や立地、もともとのコミュニティとの関係性、自治会長の姿勢など、さまざまな要因によって「今」のとらえ方、これから未来への展望が異なるのです。同じ市民であっても、自宅や家族を失った世帯と、直接的な被災は免れた世帯とが隣同士で生活を続けるといふことは本当に難しいことだと思えます。そんなことはどうしようもないことだと頭の中で分かっている、自然とそれぞれの行動の動機に影響を与えているのです。「被災地」と一言で言ってもまったく同じ

被災地はなく、そこへ住む人も多様性を持って生活をしています。被災の仕方はもちろん、性別や年代、疾患・障がいの有無、健康度の違いなどお互いの多様性を認め合いながら、復興という大きな共通目標を実現するため一歩ずつ被災地では歩み続けています。

復興に当たって気をつけなければならぬのが復興「事業」をすること。目的にしてはいけないということ。数々の復興事業が国、県をはじめ進められています。それぞれに予算が伴うものであり、数字的な成果や評価・実績が求められます。事業を実施する以上やむを得ないことですが、決して事業実施が目的ではないことに再度、立ち戻る必要があると思えます。目の前の被災者と表面的に向き合い、計画した事業を粛々と遂行することが被災者のためになるはずもありません。現地の方々は、敏感にそのことを感じ取ってしまいます。支援者が全

Ⅲ 求められる融通無碍な 保健師活動

トされているような気がしています。

2月17日に開催された17回目の包括ケア会議は、市内8町の地区別にそれぞれ担当している保健師さんに現状と課題を発表いただきました。「何で今ごろそんなレベル」と思われるかもしれませんが、担当している保健師さんと言つても、発表できた純粋な市の正規職員は二人だけで、そのほかは名古屋市からの派遣や非常勤の保健師さんで一年が経過しても厳しい実情にあります。ですが、立場は何であれ、市の保健師として「保健師の目」で発表いただいたことに大きな意味があると思えました。それは、今回の包括ケア会議でも多くの方が何度も話されていた、いわゆる「仮設住宅の住民」と「在宅の住民」両方への活動を考えたとき、これからは仮設住宅だけでなく地域全

力でやっているのか、被災者のためにやっているのか、自分のためにやっているのか、表に出てくる言葉や行動と心の底にある真意がどうなのか、そういったことを一瞬にしてかつ自然と見抜く力が備わっているのです。だからこそ、被災地支援には被災地全体を包み込むような大きなエネルギーが必要なのです。本音と建前を使い分ける日本人ですが、被災地支援ばかりは本気で向き合わなければ被災者を、被災地を傷つけることになります。私も現地に入り戻ると、しばらく頭も身体も動けなくなるほどすべてを出し切り、使い切つたような感覚になります。当たり前ですが、被災地は毎日が被災地であり、一年たつても被災地であり、永遠に被災地ですので、毎日が真剣勝負、二度とない活動なのです。

この1カ月は、岩室紳也先生と現地の子育て支援団体や健康運動サークルのみなさんとお話をする機会を設けま

した。以前から月1回の関係者が中心となる包括ケア会議だけでなく、市民のみなさんとともにこれからの陸前高田について雑談をしながら語り合う時間をもちたいと考えていましたので、ようやく少しずつですがそういうことができるようになってきました。

岩室先生のお話を聞いてくださったみなさんは自分自身のこの一年を振り返り、重ね合わせながら今の気持ちを率直に語ってくださいます。経験豊かな岩室先生でさえ、被災地でお話をさせていただくことにはさまざまな緊張を覚えるそうです。他ではそれほど抵抗感なく使える「家族」「夫婦」「友人」といった言葉も、住民の10人に1人が亡くなっている被災地では、時にはフラッシュバックを生む可能性がありま

体を俯瞰して地区を診断し、活動を計画・実施していく保健師本来の姿勢が重要になってくるからです。

これまでは優先順位から考えると「直接的な被災を受けた住民」Ⅱ「仮設住宅の住民」ばかりがどうしても支援の対象となり、実際の活動も仮設住宅を中心とせざるを得ないところがありません。仮設住宅ではなく、個人宅へ避難された方々も数多くおられることも悉皆調査から把握でき、支援が十分に行き届いていないことも課題として挙げられていましたが、実際には具体的に活動することはできていませんでした。各NPOや外部からの支援団体の活動や支援が、直接的な被災者に偏ってしまうのは、ある程度その活動の目的から言ってもやむを得ないのかもしれない。しかし、市の保健師は被災の有無、程度に関係なく地域を見ていく立場にあります。生活基盤もまちそのものもまだまだ復興して

いない中で、できることとできないこととはたくさんあるのですが、情報を集め統計的にデータを出しながら、実際に地区を踏査して五感で確認し、地域で生活している多くの住民（一般住民：primary informantと、自治会長や民生委員など役職のある住民：secondary informant）、そして市内外の関係機関関係者、他分野の関係者の意見を聴取し、それらを統合させてその地区をアセスメントしていける力を持っているのが保健師なのです。

さらに陸前高田市では、震災前は行政区ごとに委嘱していた保健推進員とともに地域の健康づくりを進めていました。今回の会議ではその手始めとして、基礎データ(表)を基に率直に現時点での思いをお話しいただきました。表には住民の代表である保健推進員が受け持つ一人あたりの世帯数も入っています。保健師さんたちの発表はまさしく保健師として公衆衛生的に地区を

俯瞰し、さまざまな情報を統合させていった結果だつたと思います。その発表を聞くことで、関係機関やNPOの方々もあらためて仮設住宅の住民だけが活動の対象ではないことを共通理解できるきっかけとなつたと思います。

従来の保健師活動はもろろのことで、これからの被災地で求められている保健師の活動は、誰が見ても支援が必要であると考えられる方だけではなく、地域のすべての方が対象となるため、医療や福祉にはないアウトリーチ（こちらから地域に向く）することが求められています。健康課題が顕在化していないところにも入っていくこともあるため営業活動に近い部分もあるかもしれませんが、それこそ保健師活動の真骨頂なのではないでしょうか。みんなが気づき、誰が見ても分かる支援を必要としているところで活動するのはいわば当たり前であつて、乱暴な言い方になるかも知れませんが、

表 陸前高田市における震災前後の町別基本情報

町名	面積 (km ²)	行政区数	町別世帯数 (H21.4月)	保健推進員一人あたり受持平均世帯数	町別世帯数 (H23.10月)	仮設世帯数 (%) (H23.10月)	町別人口 (H23.10月)
1 矢作町	108.90	16	589	36.8	681	153 (22.5%)	1,923
2 横田町	43.55	8	437	54.6	560	218 (38.9%)	1,656
3 竹駒町	14.91	8	423	52.9	554	272 (49.1%)	1,637
4 気仙町	18.22	14	1,043	74.5	794	172 (21.7%)	2,308
5 高田町	10.31	19	2,801	127.3	2,201	444 (20.2%)	5,265
6 米崎町	16.64	15	904	56.5	977	239 (24.5%)	2,828
7 小友町	8.81	10	622	62.2	651	222 (34.1%)	1,954
8 広田町	10.95	15	1,092	72.8	1,085	224 (20.6%)	3,601
全町	232.29	105	7,911	72.6	7,503	1,944 (25.9%)	21,172

それは市の保健師がやらなくてもいい部分かもしれない。情報を統合させていった結果、見えてきたそれまで気がつけずにいた健康課題にアプローチし未然に防ぐことができたり、人と人

一年間、陸前高田市を引っ張ってくださった日高橘子保健師を中心に、神戸市や多くの関係者の協力を得ながら被災後の保健医療を中心とした活動記録（平成23年3～8月分）を中間報告としてまとめようとしています（まとめましたらインターネット¹⁾で公開される予定です）。震災以来、全国の本当に多くの方々のお力によりここまで復旧・復興に向けて歩み始めることができました。この場をお借りしまして重ねて心より御礼申し上げます。

ですが、陸前高田市は部分的な復旧は進んだものの、復興したと言えるようになるにはまだまだ先の話で、5年、10年単位の時間を必要としています。つまりはこれからなのです。一年で何が落ち着いたとか、整理されたわけではなく、ようやく復興の途に立ったところなのです。震災以来のこの一年間、何となく「支援」という言葉を使ってきました。最初は物資的にも人

とをつなげてその後の活動の広がりを持たせたり、そんな地味で地道な活動こそ保健師ならではの活動だと思いません。そして、そういった保健師活動の特徴は今回の震災で、はからずも注目されるようになりました。

これまではどちらかと言うと、住民の主体性を慮るばかりに保健師は黒子的な存在としてそれほど表舞台には出てきませんでした。語弊を恐れず申し上げればそれが美德とされてきた時代もあったかもしれません。ゆえに住民への認知度は低く、社会的に見てもその存在意義や役割はよく分からない、理解されにくいものとして扱われてきました。同じ看護職である看護師や助産師の活動がすぐイメージできるのに対して、保健師は何をしているのか分からない、イメージできないという状況になってるのが現実です。今回の震災により保健師活動が注目されたと書きましたが、それでも「災害看護」

材的にも何もないところからのスタートであったため、支援をする側と支援を受ける側ということに特に違和感を抱くことなく使ってきました。しかし、最近では自分自身が行動していることも含め、これは「支援ではない」のではないかと思うようになってきました。もちろん、まだまだ支援を必要としている物や内容もあるので一概には言えないのですが、それでも何となく被災地支援とか復興支援という言葉に疑問を抱くようになっていきます。

支援とは文字通り、「力を貸して助けること」です。しかし震災後、被災地支援に入られた多くのみなさんがお気づきだと思いますが、支援に入った方が逆に被災地から、被災者から力を、元気をもらって帰って来るという経験をされているはず。被災地へ力を貸しに、被災者を助けるために入ったはずが、逆に被災地から力をもらい、被災者の生きる姿に励まされてしまっ

と聞くとイメージするのは医療として医師とともに活動する看護師であり、急性期の活動に注目されてしまったのは否めません。先日、私が勤務する大学であった一般入学試験の面接でも多くの高校生が災害発生時の看護師の活動に憧れを抱いて入学を希望しており、災害時、公衆衛生的に活動している保健師を理解している受験者は皆無に近い状況でした。

災害急性期にあっても一年がたった今の時期のような慢性期にあっても、一住民から医療機関等関係機関関係者まで、さまざまな立場にある方々と自然にかかり続け融通無碍に活動を展開できる保健師の姿勢（存在）こそ被災地でも非被災地でも強く求められるものではないでしょうか。

Ⅳ 支援から協働へ

今、現地では名古屋市の支援として

た———ということが、被災地のあちこちで起きていなかったでしょうか。そうするとこれはもう「支援ではない」のだと思います。どちらかが上だとか、強いつか、正しいとか、そういうものもまったくありません。

外部からの支援者の都合中心な、現地のためにならない活動は論外として、それ以外の多くの支援活動は「協働」というスタンスに立脚しているように思います。特に一年が経過し、これから本場の意味で復興しようとしていくにあたっては、支援ではなく、被災地とともに進む、協働してくれる人々が求められています。マンパワー不足は否めないため、平成24年度も名古屋市の関市から保健師の派遣をいただく予定ですが、その方々とともに、陸前高田市の若い保健師やスタッフ、関係者、市民のみなさんと協力しつつ復興に向けて共に私も岩室先生も活動させていただければと思います。

ただ、気をつけなければならぬのは、協働という名の強制、押し付け的な支援ではないかということ。私自身、協働を研究していたこともあり、「協働のために協働すること」は協働ではないと考えています。「協働」という漢字が使われ始めたのも最近で、新しい言葉です。「共同:common」ではなく、「協働:collaboration」なのは、単にお互いが力を合わせるということだけでなく、「同じ目的」のために対等な立場で協力し、お互いの特性を生かし、影響し合いながら進んでいくことを大事にしているからだと理解しています。外部から入る側の目的のために活動が進められているのはその時点で既に協働でも支援でもないのです。現地と同じ目的を共有し一緒に進むこと、そういう姿勢がこれからは重要になってきます。震災だけでなく最近では多くの地方自治体の組織機構の中に「〇〇協働推進室」とか「〇〇協

みなさんと考えたいと思います。私たちがいわゆる保健医療福祉に従事する者は、元々の気質として人に何かを施したい、そういう目に見える形で動きたい、役立ちたいという性格を持つている方が多いと思います。今回の東日本震災でもまさしくそうです。中には直接的に支援に入れないことを申しわけなく思っている方もいるかもしれませんが、ですが、被災地で何か具体的に活動することだけが復興につながると思いません。保健所勤務時代、精神保健を担当していた際に「ただ隣にいただけ」でもある方にとっては力になるということを経験したことがあります。それまでの私は、若かったこともあり、何でも何か手を差し伸べることがその方のためになると考えていました。しかし、そのことがかえってその方のためにならない、よかれと思って活動していたことが、実はその方にとってはマイナ

働推進課」というセクションが設けられるようになってきました。地域保健活動に限らず、もう行政だけで地域での活動を進めることは無理であり、市民と協働せずに実施すること自体もはや不可能になっていることの現れだと思えます。しかしこれも、実質的な中は行政からの依頼や場合によっては指導的なかかわりがあるなど、市民へ支援を「願う」ようなスタイルのまま、実際は協働になっていない場合が数多く見受けられます。協働しようとして協働することは協働ではないというのがその所以です。気がついたら、振り返ってみたら、協働だったのかな？というくらいお互いの立場を越え、または忘れて共通の目的のために活動に没頭し相互に推進していく、それが本来の協働のスタイルだと思います。

昨年の12月10日にNPO法人陸前高田市支援連絡協議会「Aid TAKATA」（村上清代表）が、「陸前高田災害F

スになっているということを気付かさなりました。今の被災地もそうです。「ただ隣にいただけ」の活動をしようとしている方は少ないと思います。現地の状況、スピード感、雰囲気に合わせて「待つ」力、「待つ」勇気がこれからは重要になってくると思います。何もしないでただ隣にいたのでは訳が違います。同じ時代を生き、いわば「同じ列車に乗っている私たち」にできることはなんでしょうか。ひたすら待ち続けて復興が遅れては本末転倒ですが、そういう状況を判断しながらの間（ま）を持つることを大事にしたいと思います。来月以降も私は岩室先生とともに毎月1回ペースで現地に入り続けます。これまでは包括ケア会議や復興計画など全体にかかわる大きな枠組みのことばかりで私自身も精一杯でしたが、今は現地のみなさんと適度な間（ま）を持ちながら、そして拙速に目標や結果・成果を求めるのではなく、「待ち」

M」を開局されたことは1月号でもお知らせしたところですが、このラジオも市民のためのものであり、市民ともに創りあげていくものだろうと思います。現在は、まだ認知度も低い様子で、一緒に番組づくりをしていこうという声は少なく、3月から岩室先生と私が現地入りをした際に「コマを持たせていただく予定となりました。インターネット²⁾でも聴取できますので聞いていただければ幸いです。この活動も決して特定のNPOや一部の市民のみなさんのためのものではないはず。今はまだ市民の数%しか聞いていないかもしれませんが、陸前高田の復興という共通目的を確認し合いながら進めていくことで、少しずつ利用者も増えていくだろうと思います。

V 「待つ」勇気

おわりに何が今の被災地に必要か、

ながら次世代を担う若いスタッフをはじめみなさんと一緒に進んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、本誌での報告の機会をいただき、またまさしく協働の姿勢で見守り続けてくださった編集者と、公益社団法人地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター長・岩室紳也先生、そして全国の地域保健、公衆衛生を愛する読者のみなさまに心から感謝申し上げます。また機会があれば、随時、陸前高田市の様子は本誌でもご報告したいと思えます。これからも行動の中に未来（答え）があると思いを進んでいきたいと思えます。

一年間本当にありがとうございました。

文献・インターネットサイト

- 1) <http://www.koshu-eisei.net/saigai/rikuzentakata.html>
- 2) <http://www.simulradio.jp/>
- 3) <http://www.simulradio.jp/asx/rikuzentakataFM.asx>